

薬草まじない

エイモス・チュツオーラ

土屋哲訳



晶文社

著者について

エイモス・チュツオーラ

一九二〇年、ナイジェリアのココア園に働く農夫の子として生まれる。ハウスボーイをしながら高等学校を卒業。カジ屋、労働局の小使い、放送局の倉庫管理人などをしながら小説を書く。『やし酒飲み』(一九五二)『神々の森放浪記』(五四)『勇敢な女狩人』(五八)などのアフリカの神話や民話の世界に根ざした怪奇で幻想的な作品で、欧米の文学界で高い評価をうけている。

訳者について

土屋哲(つちや・さとる)

一九二三年和歌山県生まれ。東京大学英文科卒業。現在明治大学教授。アフリカ文学およびアフリカ現代史専攻。

著書『近代化とアフリカ』

訳書—A・チュツオーラ『やし酒飲み』、J・

ガンサー『アフリカの内幕』、N・ゴードイマ

『現代アフリカの文学』、M・クネーネ『偉大

なる帝王ジャカ』、P・コーラ『なぜどうして

ものがたり』ほか。

やくそう
薬草まじない

一九八三年四月三〇日発行

著者 エイモス・チュツオーラ

訳者 土屋哲

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・一二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六・六二七九九

中央精版印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

薬草まじない

エイモス・チュツオーラ

土屋哲訳

Amos Tutuola :
THE WITCH-HERBALIST OF THE REMOTE TOWN
Original Copyright © 1981
by Amos Tutuola
Japanese Copyright © 1983
by Shobun-sha, Publisher, Tokyo.
Japanese translation rights arranged
with Faber and Faber Ltd., London,
through The English Agency Ltd., Tokyo.

薬草まじない 目次

薬草まじない 7

訳者あとがき 275

ブックデザイン 平野甲賀

ロッキータウン

ロッキータウンの住民たちは、八百万^{やおよろず}神々のなかでも、とりわけ鉄の神さま、雷の神さま、神託の神さま、川の神さま、川の女神さまを崇拜していた。すべての神像や偶像、それにロッキータウンの祭りごとを守護する^へ国の守り神^もも、かれらの尊崇の的だった。住民たちは、トラやライオン、オオカミ、ヒョウなど、野生の動物に囲まれて暮らしていた。ジャングルや森林が、この町のすぐ近くにせまっていたからだ。

わたしの父は、ほかの古老たちより聡明だったので、神託を司祭する者たちの頭領とか、さまざまな神々を信じる住民たちの長という地位に祭りあげられていた。ところでその町から二キロメートルばかり離れた町はずれに、深い大きな川があった。そしてその川の土手の近くにいくつのお社^{やしろ}が立っていた。そのお社に町の人間はみんな自分たちの神さまや偶像、神像を祀^{まつ}っていて、それらの神さまや偶像・神像には、それぞれに違ったご供物^{ぐく}がそなえられていた。

深くて大きなこの川は、流れがとても烈しく、荒波を立てながら滔々^{とうとう}と南に向って流れていた。この川の水は、大昔からその水源地に立っていた、小さな丘のようななんともふしぎな水差しの

口から、たえまなく噴き出ていた。大昔からあったこのふしぎな水差しの中には、大胆で怖ろしいさまざまな像が彫られていて、そのうえ水差しからは、ぞっとするような、音色のちがう音がいくつもきこえてきた。とても美しい白い砂でできた土手に沿って、姿の美しい巨木やヤシの木、ココナツの木がきれいな並木となっておい茂っていたのだが、このような怖ろしいことのために、人びとは川やこの巨大な水差しに寄りつくともしなかった。

さてこのロッキータウンに住む人間は、大人も子どもも、それぞれが自分の尊崇する神さまとか、偶像、神像をもっていた。したがって数えきれないほどたくさんのお社が、川の土手に建てられ、ときにこの土手は、〈神さまと偶像、神像の寺院〉と呼ばれることもあった。かりにもこの町の住民で、尊崇する神さまや偶像、神像をもっていない者がいれば、その者は子どもや大人たちから忌避されたばかりか、不信心者とみられ、だれからも相手にされなかった。

国の守り神

ところでロッキータウンには、町の祭りごとを守護する〈国の守り神〉と呼ばれる神がいた。この神さまは雷の神をのぞけば、のこりの神々や偶像たちすべてのなかでいちばん力が強く怖ろ

しい神さまだったので、特にこの称号がつけられていたのだった。この〈国の守り神〉は、背丈が、見た目にも怖ろしそうな巨人ほどもあり、人間の目では正視できないくらいすさまじく、怖ろしい形相をしていた。そして右手にもったとても長くて大きな槍を頭上にふりかざし、近づくと、すぐ傍に立とうものなら、たちどころにその槍で突きさされそうな怖ろしさだった。この神さまがふりかざしている大きな怖ろしい槍は、鋭く研ぎすまされ、それが放つ光は目もくらむばかりで、目を傷つけずに三十秒とは見ておれないほどだった。

この〈国の守り神〉の神体は、ライオンやトラ、ヒョウ、ワニ、イノシシ、森トカゲなどの動物の皮でおどろおどろしく飾りたてられ、これらの皮が渾然一体となって、ロッキータウン・スタイルともいふべき独特の巨大な衣装を織りなしていた。この巨大な装束は、ヒジ、首、モモの半ばあたりまでおおっていた。ところでこの神さまは左手でしっかりと完全体の人間のガイ骨を握り、まるで上部が平坦な台の上に直立し、その台は地上約二十メートルのところにあった。そして台のまわりにはおびたしい数の男女、動物、あらゆる種類の巨大な鳥の頭ガイ骨がついており、とりわけ神さまの足のまわりにその多くが集中していた。

この神さまの首は、とても大きく、太い血管がいくつか首のまわりから突出していた。目はフクロウの目そっくりだが、それよりは大きく、はるかに怖ろしかった。そのこわい目は、一分間隔でクルリクルリと違う方角に動いた。鼻は人間のと同じ形をしていたが、人間のよりはずっと大きかった。鼻孔は、大きなビンが楽々に入るほどの大きさで、頭は人間と同じ形をしていたが、

人間のよりはずっと大きく、髪の毛は、重さが一トン以上もあり、何度となくその上に注ぎこまれる、腐った臭いの動物とか人間などの血でぐちゃぐちゃになっていた。両アゴはそれぞれ平たくて分厚く、人間が見て笑えるといった域をはるかにこえていた。

この「国の守り神」の上唇は、下唇のうえにおおいかぶさっていて、上にも下にも動かすことができなかった。大量の長い髪の毛が上唇を一カ所に固定していたからだ。そして下唇は、とても長くて分厚いアゴヒゲの重みのために胸の方にさがっていた。

ところでアゴのひとつは、白と赤のペンキで塗られ、もうひとつは白と黄色に塗られていた。強い風が吹きはじめると、さまざまな種類の動物の皮を縫ってできている装束がたてる怖ろしい音が人の耳にも聞こえてくるのだが、人間にしてみれば、むしろ聞こえない方が幸福だった。ところで、醜惡で怖ろしいその容姿のせいで、町の若者たちはこの神さまをとて恐れていた。だが一方では、王さまに対してすら払わないような尊敬を、この神さまには払っていた。

町のふつうの人間がそれぞれに祀っているおびただしい数の神々や神像は、「国の守り神」と同じように、この川の土手にあるお社に祀られ、十月には、それらを祀る特別の儀式が十七日間、昼夜兼行でとりおこなわれた。それぞれの神さまや神像に捧げられるご供物はまちまちだったが、「国の守り神」に対しては、コーラナット、にがいコーラナット、やし油などとともに、ほとんどあらゆる種類のブッシュの動物や家畜が供えられた。ところでこの「国の守り神」というのは、実はものすごく強力な、そしてとても親切でやさしい川の神さま、または精霊の化身だっ

たのだ。

年に一回、この川の神さまには、特別のご供物が捧げられた。だが多くの人びとは、そのうえさらに感謝の貢物を捧げていた。いつもはこの神さまはとても親切でやさしいのだが、ときには冷酷非情になることもあったからだ。つまり、子どもの産めない女に子どもを授けるときもあつたが、残酷にも、泳いでいる者を溺れさせたり、かれらを川底の自分の棲家すみかに引きずりこんで、一生涯そこに引きとめておくこともあつた。そこで町の人間は、この神さまにご供物を捧げる時節がくると、毎年巨大な木を切り、それを刻んでとても大きなカヌーを造り、船体のまわりにいくつも大胆な神の像を彫つたものだった。その神像にはそれぞれ異なつた色のペンキが塗られ、カヌーの外側と内側にも美しくペンキが塗られた。そのあと若い男とうら若き女が、それぞれ一人ずつご供物として、その他の品物といっしょにカヌーに運びこまれた。それから動物や家畜が何びきも殺され、その肉を料理して、集まつた人みんなが心ゆくまでその肉を食べた。そしてかれらは歌つたり踊つたりしながら、カヌーと〈国の守り神〉のまわりをグルグルまわるのだった。やし酒を飲みながら、そのようにしばらくの間歌つたり踊つたりしたあと、〈国の守り神〉の御前で大きな雄羊が殺され、その血をまず町の人びとは〈国の守り神〉に注ぎ、そのあと残りの血を美しく着飾つた若い男と女のそれぞれの頭に注いだ。それから全員で神さまに、自分たちの捧げたご供物を納め、そのかわりに平和と健康を授けたまうよう心をこめて祈つた。心をこめて二十分ほど祈つたあと、ドラマー（太鼓叩き）がドラム（太鼓）を打ちはじめ、みんなदैいっせ

いに川の神さまを讃える歌を大声でうたいだすと、屈強な男が何人か出てカヌーを川の中央まで押しだした。川の水が静かにカヌーを運びはじめると、その姿が見えなくなるまで、ドラマーはドラムを打ちつづけ、残りの人びとは歌い、踊りつづけた。だがカヌーの姿が見えなくなると同時に、人びとはなおも歌い踊りつづけながら、町の方へと引き返していった。

わたしが狩人になったとき

わたしが遊び仲間たちよりはるかに強くまた勇敢になり、大胆でたくましく成長してゆくのを見たとき、父はわたしに弓ひとつとたくさん矢を買ってくれた。そしてわたしに、近くのジャングルへ入って、野獣を獲^とってくるように言った。父がわたしに弓と矢をくれたとき、わたしはともうれしかった。でもわたしが何種類もの野獣を射止めて町に帰ってくるのを見て、町の人たちはびっくりした。

それ以来、若者も老人も、わたしを見るたびにこわがった。数ヵ月間というものは、毎日のように野生の動物をたくさん獲りつづけたので、友だちはみんな、わたしを見すてて離れていった。ジャングルの野生の動物を殺しつづけた果てには、かれらをさえ殺すかもしれないと思ったから

だ。わたしのことをかれらがどう思っているのかわかったとき、即刻わたしは、動物の肉をもつて、かれらのところを訪れた。そしてその動物の肉を食べてからというものは、かれらはぜんぜんわたしをこわがらなくなり、わたしたちは、わたしが狩人になる以前と同じように、いっしょに仲よく遊びつづけたのだった。

ついにローラと結婚

二十歳になったとき、わたしは父と母に、そろそろ結婚したいと申しでた。わたしからこの話をきいて、両親はとても喜んで、自分ですてきな女を探すようにと言った。

そして両親も、二人のなかからよい方を一人選べるように、すてきな女を探してあげようと言ってくれた。でも最後にはわたしはとても悲しい思いをする破目になった。というのは、わたしが近づくとき女どもはみんな、こわがって逃げてゆくのだった。野生の動物を殺しているのだから、きっと自分たちも殺されてしまうと思っていたのだ。でも数ヵ月たってからというものは、女がわたしとの結婚に同意しようとしまいと、気にとめなくなった。いつかは町じゅうの人たちが、わたしがかれらのためになるよいことをしているということを知ると信じていたから

だ。というのは、わたしは野生の動物を殺しはじめてからは、それ以前に比べて、町の人間の生命がはるかに多く救われていたからだ。事実野生の動物は以前ほど、人間や家畜を殺しに町へやって来なくなっていたのだ。

これら野生の動物を獲_とっていた五年間というものは、町の人間はわたしのしていることを理解しなかったし、両親がわたしとの結婚話をもっていても、女はだれひとりとして同意してくれなかった。ところである真夜中に、ある考えがわたしの父の心に浮んだ。つまり、父といちばん仲のよい、この町の創始者でもある親友に、ローラという名前の美しい娘がいること、そしてこの創始者のただひとつの心配といえは、この娘のことだというのに、その娘がまだだれとも結婚していないことを思いだした。そこで翌朝、早速父は創始者に至急会いたいというメッセージを送った。二人は心の通いあう大の仲良しだったので、創始者が父のところへやってくるのに、六十分とかならなかった。

父の友人である創始者がやってきたとき、二人は会ったとたんにきまったように先をきそって口を切るのだが、このときはまず創始者の方から父に「神々と偶像と精霊たちの主祭者で異教徒でもあるそなたさま、こんにちは！今朝のご機嫌はいかがですか。神々や偶像や精霊たちの不平不満はございませぬか」と大音声で呼ばわった。すると創始者の口舌が終るのを待ちかねたように、こんどは父がにつこり笑いながら、これまた大音声で、「こんにちは、神々と偶像と精霊崇拜者の創始者どの、わたしには、いささかの不平不満もございませぬ！ところでそなたさま

の今朝のご気分のはどは？」と応じた。

そんな具合に双方が挨拶を交わしたあと、創始者は、父がすわっていたマットに腰をおろした。父はまだ創始者の娘のことを何も話していなかった。父はわたしに、朝食用のやし酒の入った小さなタルをもってくるように言いつけた。わたしは即座にタルの口からやし酒の白い泡が勢いよく噴きでているやし酒置場へ走っていき、そのタルをもってもどり、それを二人のまえに置いた。そのあとまた、隅っこの置場へ引き返し、ひょうたん二つをもってもどり、二人にやし酒をなみなみとついだ。

心ゆくまで痛飲してしばらくたってから、父は近くにあったヘアヨの盤を自分たちのまえに引きよせた（ヘアヨというのは、ヨルバ族の一種の遊戯で、ワリとも呼ばれる）。かれらは大きな声で冗談をいったりして、ヘアヨのゲームに興じはじめた。

約四十分たったころ、父が連続して三回友だちの創始者を打ち負かした。このことは、父が切りだすことになっていった創始者の娘の件で、わたしどもの希望が叶えられるなよりの吉兆だった。そのあと二人はヘアヨの遊びをやめ、ふたたびやし酒を飲みつづけると、早速父は創始者を招いた用件を切りだした。息子にふさわしい嫁を迎えたいと五年もの間骨折ってきたのだが、なかなかうまくゆかないので、と父は説明し、だからもしもあなたの娘さんを自分の息子の嫁にもらうことに承知してくれたら、こんなうれしいことはないのだがと父は言った。父からのこの希望を聞いて、創始者は頭をあげ、このことについて二分ばかり考えてから、また頭をおろした。そ